
夢芽（ゆめ）

早村友裕

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢芽

【Zコード】

Z3530E

【作者名】

早村友裕

【あらすじ】

初めて自分が狂う夢を見た　吉原の花魁、夢芽は、次期太夫候補と称され華やかな日々を送っていた。ところがその実、夢芽の胸内では既に黄泉への憧れが濁んでいたのだった。

生まれて初めて、自分が狂う夢を見た。

見下ろした両手と襦袢は真っ赤に染まつていて、きっと、血なんだろうと冷静に判断する自分がいる。喉の奥からは出したこともないような甲高い狂喜の叫びが絶えず飛び出し、目が回るのも構わず只管にくるくるとその場で回転していた。血を吸つて重くなつた帶に襦袢に絡め捕られ、足は縛れ崩れて行く。

それなのに、心の中はこの上ない程に凧いでいた。喉から嬌声を発しながら、周囲の景色が蕩けて行くのをぼんやりと認識しながらも何處か安堵している。此れで總てから逃れることが出来る、と。嗚呼、夢と現実とを区別するモノを最初に曖昧にしてしまったのは、いつたい誰なんだろう。

不知我之夢為胡蝶与 胡蝶之夢為我与

そんな愉快な事を言い出したのは、いつたい誰？

いつたいどれ程の時を過ごせば、此処から遁れ得るのか。
生を受けてから十分に歳を重ねた頃、廓に入つた。偽られて売られた娘は調査して親元に返すという決まり事があるのだが、果たしてそれが本当に守られているのか上辺の事なのか、興味は無かつた。

美しい姫様達に迎えられ、足を踏み入れたは公家の遊技場。極上の美女が銭と引き換えにあれやこれやと客を持て囃す、誰が呼んだか極楽浄土。こんな世界で心は要らぬ、必要なのは『感情』でなく『勘定』。学ぶべきは田畠の耕し方ではなく、芸と自國異國の教養。そして最も必要なのは、己を殺す覚悟

厳しい稽古と下積みを耐え抜いた小汚い農家の娘は、いつしか美貌と教養とを兼ね備えた、太夫候補の花魁と成った。

螺鈿細工の鏡を覗き込むと、未だ見慣れない顔が映る。何時まで経つても歳をとった感じがしない。結い上げた濡羽色の髪の評判は上々だが、幼いと言わても仕方のない小さく丸い顔には、不釣り合いな位大きな紫黒の瞳が目立つ。唇はもう少し分厚くても良かつたかもしぬ。

世話をしてくれる禿^{かむろ}や遣手達をしばし部屋から出し、息を付いていると衣擦れの音が部屋に近づいてきた。

「夢芽、少しいいかい？」

「高尾太夫様」

襖戸の開く気配に振り向くと、猩猩緋^{じょうじゆうひ}の花魁衣装を纏つた妙齡の女性が微笑んでいた。軽く着崩れして、骨が肌を押し上げる様まで露^{なまめ}であるのは、非常に艶^{なまめ}かしい。肌の白さと言つたらあたかも雪神が愛でたかのようだし、唇の紅はまるで赤牡丹の化身が宿つたかのような鮮やかさだ。くつきりとした双眸は女性の嫋^{たおやか}さだけでなく、何処か凜として意志の強い光輝が灯っていた。

「嫌だよ、夢芽。何時もの様に姫様と呼んでおくれ。それにあたしには紫桜^{しづら}という名が有る。夢芽はあたしの名が嫌いか？」

「いいえ、大変に美しい御名です、紫桜姫様。大変失礼いたしました」

夢芽より3つばかり上の紫桜はその美貌と氣取らない気性、それに教養だけでなく自身の深い見識によつて、ここ吉原では最高の『高尾太夫』を襲名した。

さる大名様が「執心で、近いづかこの吉原を出るとこのが専らの噂である。

が、無論、高尾太夫である本人に真意を訊ねる事の出来る遊女は

そういうない。

夢芽は数少ない、そんな遊女の一人だつた。

「ねえ姉様、ここを去つてしまわれるというのは本当なのですか?」

目に入れても痛くないほどに可愛がつてゐる妹分の夢芽から唐突に聞かれ、紫桜は戸惑つた。

「縫い子の婆が仰いました。お世話をしてくださいといふ禿達もみ

な……」

言葉尻がか細くなつていいく。

「この吉原に入つてからずつと夢芽に目をかけ、芸事も知識も多くを『え』た紫桜。遊女という職の特異性から多く悩む事もあつたが、先達である紫桜はそのすべてを受け止め、常に夢芽を導いてくれた。彼女は夢芽にとつて憧れの姉様であり、尊敬する太夫であり、大切な家族であつた。

「そ、うよ、あたしはもうすぐ此処を出る。愛しい方の元へ往くのよ」
そう言つて最上の美笑を表した紫桜は、廓へ来てからずつと面倒を見てもらつていた夢芽ですら此れまで見た事もないほどの愛らしさだつた。

姉様は本当にその方を愛していらっしゃるのだ。

「ほんやりと夢芽はそう思つ。

「夢芽、貴方は聰い子だわ。初めて会つた時、あたしがちやあんと目を付けたのよ? それから、沢山の事を貴方に教えてきたわ」
紫桜の枯茶の瞳は、いつも優しい。夢芽の言いたい事も迷いもすべてを見通して、欲しい答えをくれるのだ。

噂に聞く大名様とやらも、姉様のそんな所に魅かれたに違ひない

夢芽は、そう思つ。

「あたしが居なくなつたらきっと、すぐに太夫の名を縫にする事でしょう。大丈夫、貴方なら出来るわ。もつと多くの事を学び、この

吉原で最も人気のある花魁になるわ。何しろあたしの大切な大切な妹君ですもの……」

紫桜の白く細長い指が、そっと夢芽の頬に触れた。悲しんでしまつた妹君を慰めるよう、一度、二度と撫でていく。それに応えるように夢芽の簪に下がつた翡翠玉が一度、三度と軽い響きを奏でた。

ああ、やはり姉様は近いうち、居なくなつてしまつのだ。

夢芽は祝福の言葉も怒拗の言葉も発することができぬまま、下を向いて押し黙つてしまつた。

花魁衣装をはぎ取られ、襦袢姿となつた夢芽の上に同じく武器を置き、袴を脱いだ瘦躯の男が覆い被さつた。

「夢芽……」

聞き慣れた声がする。夏の日の風鈴の様に、涼しげな響き。蒼燕そうえんという名以外は何も知らぬ、武家の者のようにだが、この年で頻繁に夢芽を買うのだからかなり高名な家の御子息なのだろうという事は容易に想像がついた。それも眉目めいもくの整つたかなりの美丈夫で、名家の子息に有りがちな並はずれた自愛もなく、聰明な人物である事も是までの逢瀬から分かつていた。

これだけの条件が揃つているなら、外へ使いに出すことも多い禿かむろの少女達に聞けば身元くらいは分かるかもしね。これほどの男が女性たちの視線を集めないわけがない。

ふつと大名様に迎えられてここから出ていく姉様を思い、相手の客の名を出した時にはにかむ様な表情を思い出す。

自分は蒼燕そうえんを見た時、そんな表情を出してしまつてはいらないどうか？

「……夢芽」

それでも、耳元で囁かれたそれが意味を為さないのは、この情事に於いて珍しい事ではない。それなのに悲しいと思つてしまつのは、きっと唯の我儘だ。

体の隅々まで弄る手を遍く受け入れ、時折甘い声を発する。毎夜
毎夜繰り返される郭の日常としてただ受け入れていくだけ

意識の喪失に憧れを抱き始めたのは、いつたい何時の事だつただ
ろうか。この煩わしい世界のすべてに興味を失い、目的地を失つた
流離人のようにただ足を交互に進めるだけ。

視界に溜まるモノ、鼓膜を揺らすモノ、肌を掠めてゆくモノ。

感覚は次第に夢と現の挿間を彷徨う様になり、刻の体裁を奪つて
いった。

いつたいどれだけ前に進めば許されるのだろう。いつたいどれだ
けの事を学べば終りが来るのだろう。いつたいどれだけ生きていれ
ば、あの世からのお迎えがやつて来てくれるのだろう。

いつそ誰かが殺しに来ればいい。そうすれば全てが終わる。

周囲は、特に紫桜は、夢芽に過度な期待を寄せていた。無論、夢
芽自身に眠っていた能力を見越しての事だが、その求める物の高さ
に夢芽は疲弊しきつていた。求るがまま太夫候補にまで上り詰めた
が、既にその地位への憧れはなかつた。

大丈夫、貴方なら出来るわ。

紫桜が口癖のように繰り返す言葉は、罪人を捕える鎖のように、
なお夢芽の全身を這つていた。

それでも大好きな紫桜の為にと懸命に努力してきた。
が、その紫桜も今日でこの吉原を出る。

「此処をお願いね、夢芽」

「……はい、姫様」

紫桜の期待に応えようとする夢芽と、その重荷を全て捨て去りた
い夢芽とがまるで胸の内で戦つているかのようだつた。純粹で強い
紫桜の瞳を見ると、嘔吐しそうな気分に襲われるのだ キモチワ
ルイ。

もう無理です。吉原を背負つて立つ力なんて、自分にはあります
ん。すみません、姉様。すみません……

今すぐに泣きついて縋りついて謝りたい。が、夢芽の中にある花
魁としての誇りがそれを許さなかつた。まだ自分は頑張れると、叱
咤激励して此処まで來た。

もうそれも限界だ。太夫など、自分の肩には重すぎるので

「不安そうな顔をしないで。貴方なら出来るわ、夢芽。大丈夫よ」
キモチワルイ

大好きな紫桜の門出を心から祝福しなくてはいけなかつたのに、
夢芽にはどうしても出来なかつた。紫桜の事よりも、自分のこれか
らの事を考えると、とても美しい言葉は出なかつた。

口を開けば弱音と呪詛しか出て来ないだらう。

最後まで見送ることが出来ず、夢芽はくるりと紫桜に背を向けた。

そんな晩でも密はやつてくる。花魁の心にも躰にも関係なく、ま
るで蜜に群がる蟻のように。

夢芽は大勢の振袖新造や禿達かむるを引き連れて揚屋へと向かう。これ
は花魁道中と呼ばれている。華やかな行列は行灯の明かりに導かれ
てゆつくりと歩を進める。夢芽が足を踏み出す度に緋色の花魁衣装
はふわりと風に揺れた。金糸で彩つた帯は蝶を模つて結ばれ、上げ
た髪は絢爛とした櫛くしと簪かんざしが飾つている。

高野太夫であつた紫桜が引退した今、実質的な花魁の花形は夢芽
であつた。その花魁道中ともなれば如何に吉原を歩いているとはい
え、人目を惹く。

夢芽はそれが一番嫌だった。

遊女の仕事自体を嫌つた事はない。手に職も無かつた当時、自分
に売れる物はその身一つだつたのだから。男と肌を重ねる事も酷く
嫌ではない 相手にもよるが。稼ぎもかなりいい。紫桜を始めと
した先輩にも恵まれた。

しかし、多くの人が自分に注目し、何かを期待されるのは夢芽の

最も嫌う処だつた。

自分は農民上がりのただの小娘で、何も出来はしない。頼むからもう、何も、求めないで。

今日の相手もあの武家の美丈夫、蒼燕そうえんだつた。

心を無にしよう。

そう誓つた夢芽は、そつと部屋の戸を開いた。

この胸内を悟られぬよつ、この無氣力に満ちた諦めに気づかれぬよう 夢芽はいつものように美しい舞を披露し、このところ蒼燕のお気に入りである大陸の文学話に興じていた。

しかし、蒼燕そうえんは非常に聰明な男であった。また人の心に敏感で、優しく諭す能力も十二分に有していた。

光を通さない漆黒の瞳をほんの少し目を伏せた夢芽に向け、眉を顰めた。

「どうした、夢芽。何か心配事か？」

客の前だといつのに一瞬呆けていた夢芽ははつとして唇の端を上げる。

「何も」いざこませぬ、蒼燕そうえん様。さあ、安岐あき、舞を……」

夢芽は控えていた妹分の安岐にそう申し付け、自らも三味線に手をかけた。

が、くい、と後ろ手に引かれてもう一度席に戻されてしまつ。

「夢芽、そちが心配なのだ。いつたい何があつたのだ？」

何も隠さない真直ぐな瞳。奥に熱情を秘めた真摯な眼差しに、夢芽は釘付けになつた。

少し早いが人払いをし、ただ一人になつた座敷は思いがけず広々とした空間だつた。

先程までの宴の薰りが其処彼処に残つてゐる。整然とした畳の上には誰の物か、簪飾りの蜻蛉玉が転がつてゐる。蒼燕と夢芽との間にほんのりと漂う酒の香も一人を酔わせるには十分だつた。

言葉のない内に蒼燕は夢芽に寄り添い、そつと肩に手をかけた。

「太夫の紫桜が吉原を発つたと聞く。よもや、その何かに脅える様と何か関係が」

紫桜 その名を聞いただけで夢芽の胸内を抉る感覺が襲う。

思わず廓言葉も忘れ、普段姉様達にするよつた言葉で返していった。「いいえ、大した事では御座いませぬ。姉様が此処を離れて、やはり少々寂しいのです。申し訳御座いません、蒼燕様の御前でそのような私情を悟られるとは……夢芽は、吉原の花魁失格で御座います」

その謝罪をじっと聞いていた蒼燕は、ふいに夢芽の背に手を回し、強く抱いた。

「蒼燕様……？」

「嘘をつくな、夢芽。そちの恐れはさらに深い処に在る筈だ」耳元に涼やかな声で囁かれ、背筋にぞくりと何かが這う。甘美な時間を思い出し、下腹部が疼く。

夢芽は思わずこれまで漏らした事の無かつた弱音を零していた。「怖いのです、蒼燕様。私にはこれ以上の物を目指すなど、恐れ多くて出来ないです」

ほんの一いつを零してしまえば、その次々と零していくのは簡単であつた。

「もう私はずっと頑張つてきました。唄も踊りも教養も、我武者羅がむしゃらに稽古をしてきました。ですが、もう限界なのです」

蒼燕の手に力が籠る。

するとますます夢芽の口からは怖れのみが飛び出してきた。

「私はただの農民の娘です。此の様に煌びやかな衣装を纏うて貴方様のように美しく高貴な方のお相手をするなど、とても身に余る生業で御座います。ましてや太夫などと……これほど大きなお店を、街を支えていく事など出来ないです」

飛び出そうと構えていた感情を抑える術はない。それにもかかわらず、声が震える事も無くどこか冷たい響きを包有していた。不自然なほど自然に滑り出る言葉達。

既に夢芽の精神は病んでいた。

唐突に吉原へと入り、何も解らぬまま取り巻きによってその才能を抉じ開けられた。本人も気づかなかつたその力は、夢芽を頂点へと誘つた。

が、力というものは本人が自覚して初めて扱える物である。無自覚に使つてきた夢芽は、身に合わぬ地位を与えられ過度な期待を身に負つて、無事でいられる筈がなかつたのだ。如何に麻痺した心と言えど、傷も付けば血も流れる。

夢芽はそのことに気づいていなかつた。

ただただ誰にも気づかれず病み、狂氣への道を一人歩んでいったのだ。

「もう……私は疲れました」

すたすたに引き裂かれた精神は既に感覚を失っていた。辛いのかどうかすらも判別できなくなつていた。

そんな夢芽の内情をすべて見透かすかのような漆黒の瞳も誠実に、蒼燕はそつと囁いた。

「では、私と共に逃げぬか、夢芽」

「えつ……？」

蒼燕から出た言葉に耳を疑つた　逃げる、とそう言わなかつたか？

遊女の駆け落ちは見つかれば拷問、無論その相手も無事では済まない。それを識深い蒼燕が知らぬ筈はない。

「逃げると言つても海山ではない。それでは何からも遁れ得ぬ」

「では」

夢芽も敏い遊女、すぐに蒼燕の言わんとする処を悟つた。

「私と心中せぬか、夢芽」

その言葉に歓喜した夢芽の心は、既に冥界に囚われていた。此處から逃げることが出来る。すべての責を捨つ事が出来る。

夢芽の胸は躍つた。

「そちらなら私を理解してくれるはずだと随分前から確信していた。その美しき眼の奥に枯れ得ぬ情熱と冷めた絶望を同居させている。

不思議な女性だ。そのどのよつた言葉も私を肯定しているように
しか思えぬ。それは先ほど真実であると思つに至つた」

「夢芽の小さな手を握り締め、目を逸らす事もなく蒼燕は語つた。

「私は然さる武家の次男だ。お家の後を継ぐことは出来ない。それで
も私は剣が好きだった。只、其れだけで此処まで来たのだよ」

それは、初めて聞く蒼燕自身の話だった。

「しかし、兄者は病弱へいじやく……とても、本家を継ぐことはままならぬ。
血を吐く病だ、もう冬を越すのは無理であろうと医も言つた。すると
とこれまで私を氣にも留めなかつた御父上が私に教育を施さんとし
た」

切々と語られる身上に、夢芽は言葉を失つていた。

ただ彼の腕の中でじつと息を潜めていた。

「どうやら私は其れに向いていたらしく、父上も師匠も手放しで喜
んであるのだ。蒼燕なら此の家をさらに盛り上げてくれる、と」

ああ、私と同じだ　夢芽はふと思う。

突然に才能を見出され、抉じ開けられ、戸惑いながら更なる期待
を背負つてゐる。

「だが、私ももう疲れてしまつたよ。此今まで遊び歩いて好き放題
に学び、剣を振つてきた私にいつたい何が出来る？　あれほど大き
な武家を支える事など無理に決まつてゐる」

吉原の花形を押し付けられた夢芽。家督を継げと迫られる蒼燕。

一人は、魂の奥底で繋がり合い、求め合つた。

「共に逃げよう、夢芽」

夢芽にもその時、漸よつやく分かつた。夢芽が蒼燕に魅かれたのはその
見世麗しさ故でも優しさ故でも教養の深さ故でもない。無論、羽振
りの良さなど関係ない。

内に秘めしこの狂氣　そう、夢芽と同じ諦めに似た絶望を、意
識喪失への憧憬を抱いていたのだ。それはきっと当人同士にしか解
らぬ仲間意識とも呼べるモノ。

「終わりにせぬか？」

もう一度聞かれた時、夢芽は鑑かんがみるより先に首を縦に振っていた。

吉原大門を背に、闇夜に數を駆け抜けた。

手を握るは愛しき人。向かうは黄泉。捨つるは浮世うきよの柵さが。

これ以上何を望むものか。

數を抜けた先に待つのは淨閑寺 身寄りのない遊女達が葬られる終わりを司る寺院。

静まり返つたその場所ではきいきいと泣く蟲の声と草ずれの音のみで気が狂いそうな空気が支配していた。蒼燕と夢芽の足音と荒い息がその空気を乱す。

既に夢芽の簪かんざしも履物もどこかで失くしてしまつていた。真白だつた足も溝を越え數を駆つたが為に土と草の色に汚れ、着物も小枝で引き裂かれている。

それでも、夢芽の表情は活き活きと輝いていた。

寺院の裏手、遊女達の墓が立ち並ぶ場所までやつてきた一人はようやく息をついた。

汚れも構わずしつかと抱き合つてから、蒼燕はすでに殆ど化粧も取れてしまつた花魁に笑いかける。

「さあ、終わりにしよう」

「ええ」

夢芽もゆつたりと微笑み返す。まるで産まれたての赤子のような無垢な笑顔に蒼燕の頬も綻ほじるんだ。

二人は純粋だった。純粋であるが故、傍から見れば狂氣と映るほどに純粋に壊れていつた。誰にも悟られる事なく、其々の己おのが内々で。

蒼燕が懐から取り出した脇差しを鞘から抜くと、銀に濡れた刃が月光の祝福を受けて怪しく閃いた。

「夢芽」

「蒼燕様……」

鈍い音がして、夢芽の胸元から鮮血が噴き出した。

血飛沫が舞い、襦袢を汚す。それだけでは飽き足らず手も足も視界も、残らず朱に染めていく。喉からはこの世の物とは思えぬ狂喜の叫びが迸つた。痛みにも似た快感が全身を貫く。

蒼燕も返し様、自らの心臓に刃を突き立て、一気に引き抜いた。

ああ、何時か夢に見た光景と一緒にだ ぼんやりとそんな事を考える。

ただ、手に腹に付いていた血は自分が手に掛けた誰かのものではなく、自分自身から流れ出したものだった。くるくると回転するのは自分ではなく周囲の景色。

そんな事、今更もう如何でもいい事だが。

「夢芽……」

掠れた声が耳朵の奥に潜む鼓膜を揺らす。その甘美な響きは、胸の内を震わせ、快樂の波の間に突き落とす。

「蒼燕……様……」

ああ、よかつた。これで漸く眠ることができそうだ。
総ての責を忘れ、期待を捨てて。

もう誰かが何かを求めて来ることもない。

死の恐怖も痛みもない。

只、総てから解放された安堵のみが一人を包み込んでいた。

未来成仮疑いなき 恋の手本となりにけり

其は真か偽か 只、残るのは一人の女と一人の男が安住の地を

見出したという事実のみ。

現こそ夢、夢は幻、幻こそ現である。人は夢を見、夢が消えゆく。
故に『夢か現か幻か』という古の問いじきいは未だ満たされていない。

此れまでも、此れからも。
永く、永く。

(後書き)

これ、ジャンル何になるんでしょうね?
恋愛でありますか?

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3530e/>

夢芽（ゆめ）

2011年6月19日11時42分発行